

薬学部図書室

薬学部は昭和14年の医学部薬学科設置に始まり、昭和35年に薬学部として独立している。また昭和37年の火災で学部建築物の大部分が焼失してしまうと言う不幸な歴史を背負い、この時に資料室の貴重な文献類も失われたことは大きな痛手であった。昭和41年には多方面の援助で記念講堂が建てられ、その一階が現在の図書室に当てられた。

学部構成員は教官55名（講座数13）、その他の職員32名、専門課程以上の学生、大学院生265名となっている。図書室職員は定員3名と定員外職員1名。図書室面積は書庫を含めて240㎡と小規模である。

図書室再建当時から利用度の高い雑誌と、その10年間のバック・ナンバーの収集を計ることが決定されており、文献複写、相互利用等もこの雑誌が主たる対象になっている。日本薬学図書館協議会に発足時から加盟しており、学内外を問わず、開かれたサービスを実行している点に最大の特徴がある。文献複写も受付館になっており、昭和53年の調査では学内14,145件、学外1,575件を処理している。和雑誌158種、外国雑誌139種、本草関係の特殊コレクション等の複写依頼が中心である。

“Pharmaceutical Sciences”と呼ばれる薬学研究とは“医薬品に関する諸科学”であり、その研究領域は多様化の一途を辿っている。情報量の極端に多い“化学”を中心にした分野であるだけにChemical Abstractsは不可欠の二次資料となっている。生物学、医学、物理学等との関連も深く、Current Contents等の援用が無ければ十分



に研究動向を把握していくことが困難な研究部門ばかりである。学際領域の進展に伴って新しい学協会誌が増加しているが、この新規購入によって従来不可欠なものとして購入していたJournalさえ継続購入ができなくなる場合が生ずる。薬学部は薬学系の大学、研究機関と相互協力の一環として雑誌の所蔵を調整する等の努力を早くから手がけている。したがって、購入雑誌のタイトルは十分調整をされているにもかかわらず厳しい状況が生じているのは資料の単価が他の分野よりも高いことも大きな理由となっている。

図書館の近代化と言う点については情報量の問題、検索の困難さを身をもって感じている研究者自身の深刻な問題となっており、特に機械検索を実現させようという気運が盛り上がっている。

昭和54年12月からJICSTのオンライン情報検索が可能となる予定である。図書室としては未知の分野であるだけに、やや緊張して事態の推移を見守っているところである。